

會



報

昭和17年3月

115

日本山岳會

スマトラの山

ピーク・ホン・
ケルンヂ 2

アルベルト・フレイ
福井 幸男 譯



やがて海拔一五〇〇米、新しい茶園の中心地であるケジョーアロに到着した。その茶園の避難小屋に宿る許可を得た。其處で翌日の登山の準備をした。原始林中のアルバイトに馴れた十人の人夫も得た。一晩ぐつぐつと眠る。

我々は翌朝、早く出發し、海拔一七五〇米の原始林中に消え去った。空に突き上げる巨木、薄暗い森林の路、この熱帯性山地の森は低地の藪の如く見通し難い。つたや葛が枝から枝へからみ合ひ、通過し難い藪の中に、太くすいと伸びた妙な植物も見える。此の植物は通稱 *Elefantenteilen* と呼ばれる。大部分象に喰ひ荒されてゐる。此は若し繁茂してゐるなら、象に力を與へる喰物なので象が喜んで喰ふらしい。此の莖や葉のがさ／＼と騒がしい音で、遠距離から象が、来る事が一言もなく理解出来る。この興味のある象の

代りに、全く人に嫌がれる森林動物で、通過に親しい知己になる吸血蛙も住んでゐる。旅行者に襲ひかゝるのは二種類で、茶色な奴は地面に這つて居て靴の中や人間の脛の皮膚に血に飢へて襲つて来る。此の種類の奴に對しては、靴に軟石鹼をすり込むことによつて充分に防ぐ事が出来る。又反對の縁の奴はとても多く、木の枝葉から氣がつかない間に、落ちて來て頭から頸へ、又袖口へ、背中の方に這ひ降りて来る。露營の着衣替の時痒くなり、小さな杏の實の様に丸く太つた蛭を掴み取ることが出来る。血の出る傷は止められなく、數日に渡つて不愉快に痒く過すので嫌なものだ。

海拔二三〇〇米のボニドク・デング・キャンア地で最初の露營を設けた。十一時だつたので珍らしく思はれるだらうが、併し此の原始林中の登山は、正午に遅くも十四時までに露營の準備するのが規則である。そして、午後は熱帯

的の原始林の様に天幕の中でも恐ろしく思はれる雷雨を避難するのだ、天幕の建設木集め、野火の煮料理等の仕事は出来るならば、雷雨以前に終つてしまつた方がよい。天候はなほ續けて登つてもよさうだが、金くが／＼した礫岩で積みあげた如き新しい火山では水は易く地中にしみ込むので、水を充分に發見する位置に止まざるを得ない。此の様な湧泉地は登攀中、二回程あつた。貧慾な熱帯の一日が六時に明ける。正午には一日の仕事が充分に完了しなければならぬ。この熱帯地方では一日がアルペンと全く異なつてゐるのを理解されるだらう。

又午後雨が無いと、草が近くで集められるので、快適の氣持のいゝ寢床が造られる。此のキャンア地での素晴らしい發見は中部スマトラ山地から北部地方に繁茂してゐる *Anemone Sumatrana* (あれもれの種類)であつた。

翌日ゾエング・ケルンヂの源流を廻り急に高さの増す山稜を越へた。原始林の様子は、一日中、殆んど同じであつた。地面には、白く大きな *Begonia* (海堂の一種)、黄色な *Springkraut* (鳳仙花の一種)、黒い *Arvonkelhe*、樹の木に寄生する寄生植物の *Rafanophora* の圓い花等が咲いてゐた。

海拔二七〇〇米では、高度に事實制約されて植物の郡落はアルペンの高山植物の郡落と全く同じとなる。妙な高い花梗の、濃黄色の櫻草が二重になつた様な花が咲いてゐた。アルペンに於て代表されてゐる *Primula* 屬の花に入るものらしい。總べての植物を述べる事は困難だつた。登山家なら一瞥すれば、ヨロツバのアルペンの高山植物と此の蘭印の高山の植物は似てゐる様に思はれるだらう。此の類似はアルペン・コーカサス・ヒマラヤのみならず東印度のアルペルのケテン山脈を構成する第三紀層の山脈構造に一つの連繋を保つのである。創始期に高くなつたスマトラの第三紀層の山脈中の、新たに噴火したケルンヂ火山に、熱帯性高山植物が移つて行つたの

目次

スマトラの山	ピーク・ホン・	
ケルンヂ	(2)……	福井幸男 譯 1
山は船の様に	(詩)……	永樂孝一 3
「安全」さいふこさ	……	跡部昌三 3
山の名・山の地名(十)	……	白馬耕 4
圖書紹介(立教部報9、エベレスト探險記)	……	5
會員通信、會務報告	……	7

である。

濕地の植物帯の中を抜け、原始林の薄暗い森の中から、此の明るい草原にやつて来ると、眞に素敵な感情で胸一杯になる。既に述べた様に、此の草原にはアルペンにある様な花の傍に、眞の熱帯性植物の花もあつた。それは通過の困難なる叢林の中にある *Ardisia*, *Raum- und Kletterfarne* (木羊歯や岩羊歯) である。此の植物の群落から、割合に高い樺木が密生してある場所に来た。就中 *Rhododendronbühnch* (石楠屬) の群落が樹立ちの乏しいヒマラヤにある *Jol' annskrante* の花が恍惚たしめる。その附近に、*Mysinare* の清楚に咲いた橙黄色の花は *Alpen einkrant* を異境で追憶をよぶ。又優美な紅紫色の *Baumorchide* の垂れさがつてゐた。よく知られた *Barflechte Usnea* もあつた。すべて濕原にある熱帯性のもに屬する。

る、山頂への登攀は特別の奮闘もなく滑る様に行つた。海拔三二〇〇米のボンドツクの花崗と呼ばれるキャンザ地で、二度目の露營をした。その名の如く花の樂園地！這松帯の王者の *Ericace* 少なな花で石楠花屬に入る、亂れ咲く *Heidebeerbühnch* や種々の (*aulthe riant* とは離れて咲く *Rhododendron* の花は *Rauschbeere* を思ひ浮べる時に、一つの名も知らない花が甘い香りをたぐよせてゐた。又 *Eri care* 間に *Edel weips* や高く威嚴のある *Kreuzkraut* とは同じ種類の *Kompositen* *strimlein* が崇高な白さを持つて咲いてゐた。その間に此の咲き亂れる高山植物の底の濕氣に對して寢床を造るために、苦力が腕一杯に這松を取つて来たので、氣持よく *Edelweiss* と *Alpenrose* の香りに酔つて眠りに入つた。



てある、噴火は熔岩を流出しないで、たゞ粥のやうに谷底に水と一緒に流れ落ちる崩れる土砂を流出したのみであつた。南洋の火山に多いこの噴出物の土砂流は *Lahar* と呼ばれる。低い地點まで流れて来た *Lahar* の流れは河原石と比較される。その上美しいアルペンの *Schuttfelsen* が思ひ出される。この上に咲く花 *Agrostis infirma*, (*Carex hy isophila* を見た。熱帯の火山植物として典型的な種の *Hor* の *Hor* もあつた。この植物は海拔三四〇〇—三六〇〇米の高度にまで生長し、花咲き實を結ぶのである。無胞子の状態で、山頂近くに併み砂礫の中に生長してゐる羊歯も、植物の最高レコードを現はしてゐる。三八〇〇米の處では、全スマトラで最高の高度に生成してゐる植物なのだ。

エロツク山より遠くにあり、舊火口の上にある。此の噴火口は一年に少しづつ北東に位置が變り、其の際火口の最高點は一五〇米程高くなつた。最後の山頂への登攀の時、我々は珍らしい景色を楽しめた。一年の間で、此の様に晴れ渡つた日は二度となくなつたらう。東にマラツカ海峡、西に印度洋中のスマトラ島の前にある島 (*メニタ* *グイ列島*) に見る程、此の高い眺望臺からの周囲の景色は壓倒的のものであつた。又眼下には深いケルンチ峡谷があり、東には霞の中に消え去るまで山又山の圓い鎖の様なバリアサン山脈！そして其山脈が消えた様に思はれる處南に遠く海の中に一對の青いものが浮び上がつてゐた。一點の如くラホエ山の小さな噴火口の煙が昇る。他の死火山の薄暗い彼方で、太陽がキラ／＼と輝いて、山に君臨してゐる。絶壁と絶壁とで遮へぎられる、この峡谷の秘められた美を豫想する如く、不意に輝きを増す寶石と見へる太陽！キラ／＼と光る谷底には満々と溢れる水！遠くに銀線の様に、峡谷に水煙をあげてゐる瀧！朝の風がダナウ・ベントの廣い峡谷を越へて、低い響を其の落下の音を傳へる様に思はれる。

イク・ホン・ケルンチの火口に到着した。偉大な恐る可き深淵が目の前に横がつてゐる。地球の内部を見る様な氣がする。火口には約四〇〇米の深さでこの中に惡魔の如く、エメラルドの湖があつた。我々が神祕とするヨオエド・ヨツホの靜寂な湖とは反對に、空虚な活動が彼方此方の岩の間に起つてゐた。其の表面は過ぎる雲の影によつて、空想的の魔術の國の如き色をしてゐる。火口の岩の間からキラ／＼と光り輝くカスの湧出が強い勢で噴き出してゐる。此の絶え間ない發生やその持續に就いて考へ込む時、強烈な硫黄の臭く鼻をかすめる。火口壁は深く鏡の面の如き湖にまで落ち込んでゐる。此處を攀ち降りるのに可能か、岩片がにぶい音をたて、數分毎に落ち込んで水の傍の岩に衝突する度に低い音が傳つて来る。反響して數百倍も大きくなつて、苦力達はこの深淵に住む神の怒りに怖れて、逃げ出してしまつた。熱帯の蒸し暑い一日と共に、平野には活動ににぶる雲が滯在であるのに空は爽かに、輝かしい程澄んでゐた。伸び／＼とした心！暖かい寢床の中に飛び込んだやうな氣持！夕方まで滯在したい。高度に馴れた心臓の音に耳を聳てる。しばらく後、正午少し過ぎて、後を引かれながら、下山し始めた。間もなく前日の花園の露營に戻つたのである。

「山」は船の様に 穂高天狗澤にて

永 樂 孝 一

霧の海の中を

「山」は船の様に動き出した……

澎湃と寄せては返へず波と

中空へ飛び散る しぶきを後に

——あの地味な針葉樹の感激にふるへるざわめき！
それは大陸への開拓士なのか？

また

かの華かなお花畑の一群は

健氣にも何處へ生活權を

植へ附けようといふのだ

そして

白いベールに包まれた雪溪は

貴婦人の様に目ばたきもしない！

取残された「山の子」の哀愁は

太陽の五彩のテープからうまれ

遂に身動きが出来ない——と

霧の海の中を

「山」は船の様に姿を消してしまつた。

「安全」と

いふこと

跡部 昌三

『集團登山に警告』に關聯して

あらゆる場合に「安全」は必要であり、殊に山に在る登山者は、最後までそれを保持し通すことに最善の努力を拂はなくてはならぬ。

我々がより高度の登山を希望するとき、それに達する過程が、ざつとくばらんに言つて、二つあるやうに考へられる。漸進的なものと然らざるものゝ二つである。

自身の山への技術と心構えの進展につれて、より高次の山を選び鍊磨してゆく。之が私の言ふ漸進的なものであつて、「安全」といふ立場より一徹的に推奨される型である。之と對象をなすものに、よく學校山岳部などにみる鍊成方法がある。夏山を二度か三度、行つた事によつて高等學校の山岳部にはいり、二三度のトレニングの後、潤澤合宿などに参加し、秋山一度位でスキー合宿があり、冬山に挑み、所謂「しごき」が其處でなされる。之は見方によつては甚だ危く、場数が踏めてあらずして高峻な山々への闘ひは、すくなく

らず考へさせられるものがある。併し、之を救ふものに充分な準備と、豊富な日時が與へられてゐるやうである。

仲間の一人は「社會にあつて働くものにとつて、正月休みこそ、例へ三四日にせよ、もつとも纏つて休暇のとれるときである。こんな大切な時を、ゲレンデでスキーの練習に費やすなど實に勿體ないことだ。何故、例へ僅かにせよ、め

ざす高い山にはいり、とくと勉強しないか。之を外していつ勉強する時がある。」と言つてゐる。同じ銀へるのが目的ならば、心の山懷に、之れを選べと謂ふにある。スキーの廻轉が出来るやうになつてからといつてゐたら、いつ、氷雪の殿堂にまみゆる事が出来やうか、といふ事を主張してゐる。

我々は、遙かなる峯を仰いでどの道なすべきか。どれがもつとも賢明な方法であるか。いづれにせよ、「安全」は嚴として護らなくてはならぬ。しかし、「安全」とは何であるか。本當の「安全」とはどのやうなものであるか。

私はこゝで集團登山と然らざるものとの、山での安全性について考へてみたい。集團登山は全體的にみると、その容積の大なる事によつて後者より風當りの強い

はいなめない。だが、然るが故に集團登山は危険であるといふ論は成立しない。登山が「たとひその珍らしい物の價が死であらうと、それは彼等の厭ふところではなかつた」といふ意味のものを含んでゐる以上、五十歩、百歩の問題である。要は集團を構成する分子の質の如何と、選ばれたる山との關聯に含まれてゐる。

鳥合の衆の集團が、不相應な山に試みる事は、まづ危険とみてよからう。しかし簡單に言つて、集團登山の達成に破綻を來たすやうなものは、例へ小人數によつて山行をなしたとて、その安全性が保證されるものとは思へない。集團登山に警告されるものは、集團登山そのものに非ずして、對象となるものは他にある。

私たちは、集團登山が好まざる不幸を惹起した事を再三ならず見かつ聞いた。その間にあつて普通の所謂遭難問題は枚擧にいとまのない程にあつた。そのいづれにせよ、小人數ながら、或は多人數ながら遭難したといふ例は甚だすくないやうに思ふ。小人數なるが故に僅かでくひ止め得ずして遂にとりかへしのつかぬ結果を招くこともあれば、多人數のためにより惡結果を齎らすこともまたある。よ

山の名 山の地名 (十)

白馬 耕

★常念岳

二八五七米

黒人がジャナネンボウと呼んだことのある山で、このボウは坊であらう。確かな山名の由来を私は知らない。

★大天井岳

二九二二、一米

明治末葉或は大正の初期ごろまでは、まだ里人によつて、オテンシヤウとか中川のテンシヤウと呼ばれてゐた。おほてんじやう（大天井）岳などいふ土地の者には却て通じなかつた（志村氏）。當時の有明町山案内人の談にもオテンセウ（御天照）と出てくる（山岳、小島氏）。

テンシヤウ（天井）は高い所をさす言葉であり、山の頂きにもいふ。之に似た方言はいくつかありテツチヨ（秋田、福島）、テツチヨウ（神奈川）、テンギヨウ、テシゴウ、（四國）など、何れも山の頂きを指す。

★島々 信濃

南安曇郡安曇村にある部落。アヅミ（安曇）について一言すると、仁徳帝の朝に、このアヅミ

く引合に出される木曾駒での赤羽校長以下の小學生の遭難問題が、後者の型にはまるものであるが、私は遭難に直面した赤羽校長以下の責任者の美しき態度に酔ふまゝに、それらの山への態度、換言すれば全き「備へ」があつたかどうかをよく検討してみることがあるやうに思ふ。

登山の危険を危険でなくすることは、その方法、型式の如何を問はず、より多く山へはい入る事であつて、積み重ねられた體驗がそれを克服することと知らなければならぬ。世の指導者は遭難防止のために蒲團の中で寝てゐる事をすゝめるべきではない。

併し、集團登山なるが故に、指導者はその安全性に就て、一層の注意を払なくてはならぬのは敢て言ふまでもない。塚本氏が會報一二一號に於て「集團登山に警告」と題して、その山での危険に關して指摘してゐられるのは、時節柄注目されていくことであつて、集團登山が四季に亘つて、且つより高き、より困難へ進む傾向のみゆるるとき、私とても同感であり、悦ばしいことである。

だが、塚本氏の文中には未だ私にそのまゝ容れられぬものがある様に考へられたので、敢てペンを採

るに至つた。私の意の存するところは、前述の總てによつて盡きてあるやうに思ふが、その實體をもう少し明瞭にしてこの稿を終りたい。

中京の私の關係してある名古屋山岳聯盟は愛知縣下の三十二團體を以て結成され、現在では足掛け五つの年を數へるまでになつてゐる。聯盟の山に對する實踐的事業としては、加盟團體の質的向上を意味するものと、聯盟外の山野に於ける行事の援助などをなしてゐる。前者は峯登り講習會、集團スキーツアー、集團登山等となり、後者は市民登山の計畫指導、青少年團の山での事業後援指導、また市主催の町内會體育指導者の登山指導、或は強歩鍛鍊の指導等が數へられる。

冬山への集團登山として塚本氏がさり擧げてゐられる我々の白馬岳行は、スキーを用ふる集團登山として第二回目のものであり、第一回は八方尾根より唐松岳登頂、第三回は立山に之を行ひ、豫定通りに遂行して來てゐる。

第二回の白馬岳行は不肖私が計畫し、チーフリーダーとして同行したものの。参加者はいづれも聯盟加盟團體員で、加盟團體理事の推薦による人達である。参加者二十

一名を四班に分け、班長を選出して隊の統率をばかり、更にその上に安全性の確保のために、細野の人を二名わすらはして之に當て、當日は大谷定雄を先導に、嚴りな丸山作吉とし、各班は言ふ迄もなく、個々に於ても順位を嚴守して登山を開始した。天狗原にかゝる頃より天候が崩れ、乗鞍へ登るときはカスミ強風に悩まされたが、この時既に登頂の至難なことは判つてゐたので、出来る限り登つて引返すこととし、遂に小蓮華に至つて引揚げてしまつたのである。

勿論この行を起すに當つて、準備會を開き、行程に關する説明が如何なる態度で心組となつて、この集團登山に臨むべきか、またどのやうな効果をめざすべきかといふ事にも言及した。

塚本氏は「天候不良の爲天狗原方面から引返してゐて事なく済んだ。これがもし白馬近く迄行つて天候が急變した場合などを想像するとその慘状思ひやられるものがある。」と評してゐられる。果してそれは正しき觀察だらうか。我々は幸にして白馬近くまで登つてゐなかつたため事なく済んだかも知れない。併し、茲ではからずも私は「勝てば官軍」といふ言葉を憶ひ浮べずにはゐられなかつた。そ

して、塚本氏は、都合よき方向へ想像を飛躍せしめてゐられやしなやかといふ事をも、思はしめられすにはゐられぬ。

聯盟では、今年も冬から春にかけて、加盟團體の質的向上と、鍊成を目的に、集團を以てスキーツアーやスキー登山を營むべく計畫をしてゐる。襲ひ來る危険に對しては、塚本氏の警告を讀むまでもなく、充分の上に充分なる對策を必要としてゐる。

前述通り、集團登山はその容積が大なるが故に、風當りもひどく、危険の度も當然増しはする。が、その危険を徒に怖れてゐては進歩はない。「君子危きに近寄らず」式の保守型として悪いばかりではなからうが、もつと積極的、「虎穴に入らずんば虎兒を得ず」といふやうに進出しなければ、本當の意味での進歩は望めない。最後の一線を嚴として護る萬全の備への下に、あらゆる危険と困苦に莞爾として堪え、踏み越え、乗り越えてこそ、燦として輝く榮光を仰ぎみることが出来るのである。

明日の伸びゆく我々のために、これこそ必要な糧である事を、一つの觀方として強調したいと、敢て塚本氏の一文に關聯して、思ひついたまゝに記して來た。

地方は、綿津見（ワタツミ）神系を遠祖にもつ阿曇連が開拓して一郡となし郡司となつたので、郡名に阿曇を冠した。そして、安曇の文字に改まったのは、元明帝以後である。又、アヅミの語義について、加茂眞淵の説によると、アヅミはワタツミの約で海といふ義である。（北安曇郡誌）

アヅミ地方はその地勢から見て、水に縁のあつた所であるのは想像できる。

シマといはれる場所は、一般から云ふと、川の岸に臨み或は湖沼に接した部分で、且つ田畠をも併せて斯く呼ばれてゐる。信州遠山地方では田地の連なつた處がシマ之に對して畠がカイト。美濃の一部分では部落をシマといふ。（柳田先生、分類農村語彙）

飯登山麓の北蒲原郡赤谷村の獵師の言葉では、山から云つて人間の居る里をヒロシマとかフルシマと呼んでゐる。

茲にいふ「島々」部落のシマは以上説明したシマの條件に適つてゐる。川に臨んだ山間のシマである。

★錦杖岳 飛彈 二一六三米
岩峯の尖つた形からの命名

★ ★

圖書紹介

立教大學

山岳部々報

第九號

私達の持つ唯一のヒマラヤ登攀記録がその責任者に依つて發表されたことは誠に嬉しいことである

立教大學山岳部々報第九號は辻部長の常に變らぬ登山界への適切な忠言と堀田氏のヒマラヤの追想の二文と、あとは部の年報さから成つてゐる比較的簡單な小雜誌ではあるけれども我が登山界に實質的に寄與する効果は數百冊の豪華な山岳圖書に匹敵するのではあるまいか。最近の山岳圖書の氾濫は誠に驚くばかりである。そして其の何れもが美しい挿畫、鮮明な寫眞、幸福な山行の回想文で満ちてゐる。しかし、どうしてどうやつて山へ登るか、眞剣に方法と精神とを嚴密な意味の訓練の山行をあつた書物は極めて稀な様である

部報と一般の圖書とは同一に論ずることは出来ないけれども、以て他山の石とするには足りやう。

堀田彌一氏の「ヒマラヤ」の追想（上）は四章から成つてゐて、先づ最初に「ヒマラヤ行の決心」から、「カルカッタ」、次に「ヒマ

ラヤの山麓」、最後に「關ひの三十日」として第一回の攻撃迄が記されてゐる。

「斯くて十年間私はヒマラヤに就いて思ひ、悩み、楽しみ、且つ闘つて來た」と堀田氏は述べられるヒマラヤ行が一時の思ひつきやロマンティックな憧れからではなく長い間の着實な検討と熱心の結晶であることがわかるのである。數



年前の登山界を顧る時、多くのヒマラヤ遠征の計畫のあつたことを私達は知つてゐる。しかし實行されたものはこの部報に述べられた成果だけであつた。議論の多いインテリゲンチヤ的の登山者と山岳意識の低い一般大衆との間からヒマラヤ遠征の如き事業を行ふことの困難は想像に餘りある。これらに就いて謙虚に語られる堀田氏の

一語々々は此の種の計畫を胸に秘めてゐる若い登山者への良き教訓であらう。

記述はやがて船中からカルカッタへ、そしてヒマラヤ山麓へ移つて行く。山麓の風景にしても、私達の知らない、シヤモニーやツエルマツトとの比較ではなく、大町や飛驒であり、日本アルプスの谷間との比較である。山麓の行進と平行してその間の、食糧、服裝、宿舎、人夫の操縦等に就いても將來への注意さにも詳細に述べられてゐる。私達はこれを讀みながら、食糧にしても、器具にしてもどんな確證だらう、どんなテントだらうと一々頭を悩ませる必要は無い、みんな極く身近の常々手に觸れてゐる品々がヒマラヤの山中を運搬されてゐるのである。

山麓の行進も終り「關ひの三十日」と題されていよいよ山への攻撃である。冬の穂高や剣で訓練された登山者がヒマラヤの高度と氷雪を處理してキヤムプの運用を円滑に行ふかどうかは實に趣味ある問題である。

此の章は此等の問題に晴々とした解答を與へてくれるばかりでなく、遠く故國を離れて重い、有形無形の責任を負はされてゐる遠征隊員の苦勞がまざまざと語られてゐるのである。

早く第十號が發行されて輝かしい登頂の感激を知りたいと同時に此の報告を無爲に終はらせないで他日の踏石としたのは私だけの希望ではないであらう。

（尾關正二）

「エヴェレスト探検記」

ヒュー・ラットレル著

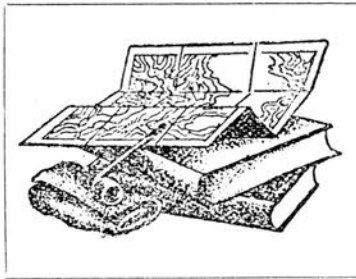
高柳春之助 譯
岡倉書房 發行
定價 二圓

本書はヒュー・ラットレル著の「エヴェレスト・一九三三年」の前半を譯したものでその内第三章の「集合」は略されてゐる。全體を通讀して見たが譯としては別に批判を加へる程の所もない。然し「山岳用語等に適譯を得ない個所があるやも計り難く」と「巻末の譯者ノート」にある如く一つ一つの譯語を拾つて見ると随分困つたものもある様に思ふ。地名、人名等にも吾々が普通使つてゐるのととは大抵異つた呼び方をしてゐるのがある。英國の「アルバイン・クラブ」を「アルプス俱樂部」と譯す事は賛成出来ない。ヒマラヤやコーカサスにわざ／＼「山」を加へてヒマラヤ山、コーカサス山などとするのも變である。「ロンバク水河」が「ロンバク水河」となつてゐるのは山の文獻を餘り讀

んでゐない證據であらう。「ピト
ン」を「パイトン」、「プリムス・
ストーヴ」を「ブライマス・スト
ーヴ」、「クールワール」を「峡谷
谿」等としてゐるのは「山登り」
そのものを知らない人の譯し振
りである。尤もクールワールを「溝
渠」としてある所もあつた。之な
らまだよろしい。アーケティツク
天幕は「極北用」より「極地用」
の方が一般的である。「ケンネ
・メーソン」は「ケニス・メイ
ス」、「バトリナス」は「パドリ
ナス」、「アブルツシイ公爵」は
「アブルツチイ公爵」、「マアシ
ード」は「モーズヘッド」、「シャ
ーバ族」は「シェルバ族」、「カ
メー」は「カメット」、「デイレ
ンフア」は「デイレンフルト」、「
グ・ラ」は「タン・ラ」と夫々な
した方が吾々にはピンと来る。遠
征隊の一行が「ケラの墓」を訪
れたとあつたが之は「ケラスの墓」
である。ケラスは虫ではなく英國人
であるから「ス」は讀むべきだ。
七七頁に「ゾングベンの人々」と
ゾンベンを地名の如く取扱ひ且つ
發音してゐるが之は「ゾンベン」

讀み且つ地名ではない。ゾンは「
縣城」を云ひ、要塞司令官を譯し
てもよい、兎に角縣城をあづかる
役人で支那語で「宗琰」と書く。
九〇頁その他で「酋長」と譯して
あるのは不可。「山稜」が全部「山
陵」となつてゐるのはどうした譯
であるか。二〇〇頁の一行目で、
六月を、七月としてゐるのは困
黄帶(イエロー・バンド)が「エロ
バンド」となつてゐた。可笑しな
バンドである。「第三キャンプ」に
は四月分の食糧」とあるのは四日
分の誤植であらうが、一三五頁の
「光る水の上を流れる小さな水河
の流れのさゝやき」は何の事やら
わからぬ。Chiche stream を「水
河の流れ」としてしまつたのが千
慮の一失となつたのであらう。原
文によると水河の上を融けて流れ
る水の細い流れの事を意味してゐ
るので、さゝやきは此の水のそれ
で水のさゝやきではない。七番目
の寫眞の説明に「ノース・イース
ト」より望むとあるがこんな場所
はない。之は「北東」と素直に日
本語にして置いた方がよいやうで
ある。

讀み且つ地名ではない。ゾンは「
縣城」を云ひ、要塞司令官を譯し
てもよい、兎に角縣城をあづかる
役人で支那語で「宗琰」と書く。
九〇頁その他で「酋長」と譯して
あるのは不可。「山稜」が全部「山
陵」となつてゐるのはどうした譯
であるか。二〇〇頁の一行目で、
六月を、七月としてゐるのは困
黄帶(イエロー・バンド)が「エロ
バンド」となつてゐた。可笑しな
バンドである。「第三キャンプ」に
は四月分の食糧」とあるのは四日
分の誤植であらうが、一三五頁の
「光る水の上を流れる小さな水河
の流れのさゝやき」は何の事やら
わからぬ。Chiche stream を「水
河の流れ」としてしまつたのが千
慮の一失となつたのであらう。原
文によると水河の上を融けて流れ
る水の細い流れの事を意味してゐ
るので、さゝやきは此の水のそれ
で水のさゝやきではない。七番目
の寫眞の説明に「ノース・イース
ト」より望むとあるがこんな場所
はない。之は「北東」と素直に日
本語にして置いた方がよいやうで
ある。



らだ。「譯者ノート」の「エヴェ
スト遠征の歴史」の中にシブトン
の隊長だつた一九三五年とティ
マンの一九三八年の二つが抜けて
ある。大きなミスと云はればなら
ない。同じノートに日本山岳會と
して寫眞をお貸した様に書いて
あるが會として貸す場合には翻譯
に對して校閲をへて十分責任をと
る約束があつた筈だ。本書の様で
は誠に遺憾である。
地圖が前後に同じものが二枚し
かないのは不親切である。原文一
〇八頁にあるルートの説明圖位は
つけて置かれれば充分。
之を要するにこうした登山探検
記の如きものの翻譯は専門家に委
せるか専門家との協同の許に行ふ
かするのが安全であると思ふ。本
書の譯者は英語はなかな／＼達者で
ある。だが惜しむらくは「山」を
知らぬ。之が私の此の書に對する

總結的な結論である。

一七・二一八(吉澤一郎)

會員の聲



ひだりがき
Yokogaki
きがぎみ
たて
がき
吉阪

我々の日常の生活から、表現慾
を一切摘みとつてしまつたらどん
なにこの世の中は味気ない淋しい
ものになるだらうと時々考へるこ
とがある。或ひは全く何もなくな
つてしまふのではないかとさえ思
はれる。併し又逆に文化の高いと
いふことは表現の手段を豊富に持
ち、それらを自由に操るといふこ
とであるともいへるかも知れな
い。紙の上に發表するものだけを
拾つて見てもそこには繪もあり、
文字もあり、數式も、音譜も、勿
論數へねばならない。この會報に
は後の二者は殆んど用ひられてゐ
ない様だが、大いに用ひられて然
るべきだ。文字にしても國字あり
漢字あり、ローマ字あり、數字も

凡そ二様のものが用ひられてゐる
更にこれから南方共榮圈のことが
澤山書かれる様になると泰文字、
ビルマ文字、印度文字等も出現し
ないとはいへない。

繪でも、文字でも又その他の記
號でも個々には何を用ひても差支
へはないが、之が一たん文章なり
式となるとどうでも左書きか右書
きか、縦書きか横書きか一つを採
用しなければならぬ。そこへ來
ると日本語程自由なものはない。
全く文化の度が高いといふのかも
知れない。併し色々な文字記號を
併用する時一體どの形式が最もよ
いだらうか。統計的に見て左書き
横書きが私は一番便利の様に思ふ
そしてこの會報もさうした形に變
へてほしい頃ではないかと考へる
が、舊來の因襲や、或ひは感情的
に支配されることなく、本當に會
報の爲に諸氏の御意見が承りた
い。左書き右書きのことが再び世
界にやかましくなり出したのでこ
ゝに一言を提した次第である。

會報原稿募集

頁數が減つたので原稿を差しひ
かへて居られてゐた方は、どうか
御遠慮なく御送り下さい。必要と
あれば何とか工面して頁數を臨時
に増す様に致します。

締切日は毎月五日です。



會員通信

關根吉郎

拜啓春暖の候も間近に接するな
感じられ候

二月一日元氣に入替し、演習に
参加せしも、旬日にして病床に就
き十三日當病院に入院命ぜられ候
腕の赤十字目に痛く映り、新嘉坡
陷落の報にも唯白き病衣の上に涙
の落つるばかりに候。一刻も早く
全快して元氣な二等兵の姿を皆様
の前に現はすことのみ願ひ居り候
先づは不敢取我身の賄甲斐なさ
をお詫びし、近況御知らせ迄に御
座候 敬具

會務報告

受贈圖書

山本明著 田中薫編
山と人 朋 文 堂
右 田中 薫氏
早大山岳部リユツクサツク第四、
五號
右 同阪隆正氏
小林隆康著 岩壁登高 博山房書店
右 博山房書店
加納一郎著 アムゼン探検誌
朋文堂
右 加納一郎氏

會員章再貸與

二二四番 大山爲三郎(舊番號
一〇二九番ハ無効トス)

◎二月關西定例役員會

二月十三日 於關西支部ルーム
出席者 中原、富田、直木、西岡
栗飯原(委任)大島、榎谷、津田、
今西、木藤。
1 日本山岳會候補者銓衡の件
2 二月研究會の件
3 富田幹事の代行期間終了と空席
一名計二名の新幹事推薦の件
4 山岳研究講座開講の件
富田幹事より講座内容及開催方法
に關する試案提出の上開講の可能
性を各方面より検討審議。開催と
決定す。會場交渉の結果により時
期を確定する事とし引續き各細目
に就き再検討の上原案を確定す。

二月常務役員會

二月五日18時、事務所にて開催
出席者、横、武田、高頭、鳥山、
茨木、加藤、金山、逸見、早川
委任 木暮外十二名
議題(議長—横理事)

一、日本山岳會候補者銓衡の件
山岳會賞を權威あらしむる爲、
萬全を期し、左の役員に委嘱し
て會賞の標準を定めしむる事と
す。横、藤島、沼井、加藤、逸
見、早川、塚本、以上
一、新年度及缺員幹事候補者検討
の件
イ、非常の際なれば新年度に行
ふべき幹事三分の一の改選は
之を行はざることとす。
ロ、缺員中の幹事六名の補充を
行ふこととす。(但し缺員幹
事の殘任期間とせず新任幹事
の任期は三年間とす)

山日記

◆殘部僅少となりました。御入用の方は至急御申込下さい。

高山深谷

定價 七圓五十錢
送料 三十錢

◆本書は非常な好評で、發賣早々書店では賣切れたやうです。
然し本會には尙少々ストックがありますから御買洩れの方
は御申込下さい。

ハ、以上二項は會員總會の承認
を得て實行す。

ニ、既に幹事の任務を代行しつ
ゝある富田、吉阪氏及關西支
部委員栗、飯原氏の三名は新
幹事として推薦することと
す。

ホ、残り三名の候補者(全部東
京)につきては次回に推薦と
す。

一、高山深谷出版記念展覽會の件
イ、東京は一月廿五日より廿日
迄銀座三越にて開催。約一萬
人の參觀者を得て盛況裡に終
了したる旨と所要經費につき
塚本幹事より報告ありたり。
ロ、富田代理幹事の努力により
關西展は二月三日—八日大阪
阪急百貨店にて開催。
一、入會申込者銓衡の件
五名入會承認。

編輯後記

特別に何もいふことはありません。日の丸の旗が毎日どこかで緯度、経度の線を一本づつ越えて進みつつある時、我々は唯黙々と順備を避えて待つだけです。

日本の占領地も終に赤道を越えました。それで之を記念に、次號乃至はその次に東印度諸島の山岳表を本會報の附録として送りたいと思ひ目下整理中です。

(吉阪・記)

會費について

昭和十七年度會費をまだお收めない方は至急御送金の程お願ひ致します。

(會計)

昭和十七年3月29日 印刷納本
昭和十七年3月31日 發行

頒價二〇錢

日本山岳會内

編輯者 吉阪 隆正

發行者 塚本 繁松

東京市芝區榮町一丁目二番地

發行所 社団法人 日本山岳會

電話芝四三二一六四九

振替東京四八二九九

東京市芝區今入町二十六番地

印刷者 鈴木 和男

印刷所 株式會社 鈴木商店

オカモトヤ 印刷部

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

山と溪谷社編 第一卷(春山編)

登山講座

B5版二百頁
定價二圓 送一五

大東亞決戦下、新しき世紀を開き進む全岳人に贈る權威名家總執筆の登山講座第一卷四月下旬刊行と決定(全六卷總目錄御申込次第進呈、尙確實入手の爲書店又は直接本社宛至急御注文を願ひます)

富士山と日本精神(井上司郎) 雪山別離(詩)(藤木九三)

山書集(足立源一郎) 吾妻山(短歌)(齋藤茂吉)

偃松の匂ひ(隨想)(木暮理太郎) 春の雷鳥(隨想)(竹内亮)

山女魚(詩)(田中冬二) 雪國の春(組寫真)(塚本閻治) 熊狩の生活(金子總平) 邦文山書五十年史(岩科小一郎) 造山の科學(安齋徹)

谷(大塚昌彌) 火山(久野久) 地名考説(柳田國男) 地形と地名(牧瀬貞一郎) 春山の氣象(佐藤順一)

山岳寫真(文と組寫真)(岡田紅陽) 同軍機保護法(編輯部)

登山用具(西岡一雄) 山岳食料(織内信彦)

山釣(伊東虎夫) 岩登りとザイル技術(西岡一雄)

全國岩場案内(東京登歩溪流會他) 本邦峠・高原一覽表(正井耀雄)

富士を繞る山々(山村民俗の會)

中央線沿線・秩父山塊・外秩父(原全教)

八ガ嶽・蓼科山(平賀文男) 南ア前衛の山(島田武)

霧が峰・美シガ原(中村謙) 婦人と登山(川森時子)

附録月報八頁

塚本閻治著

日本の山々

初版賣切中の處、新裝再版完成ノ資材不足の折につき、再版を以つて絶版と致しますので御買洩の方は至急御注文下さい。

五圓(送二二錢)

麻防水布製

キスリング型(E式)

ルックサック



★品質優秀責任保證★

布地見本進呈

大型 二 尺 二七・六〇

中型 一尺八寸 二五・二〇

小型 一尺六寸五 二四・三六

◆テルモス各種ハイキング用品

右は物品税二割を加へた改正値段です

御諒承下さい

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(33)三二一〇番
振替口座東京九一一八四番